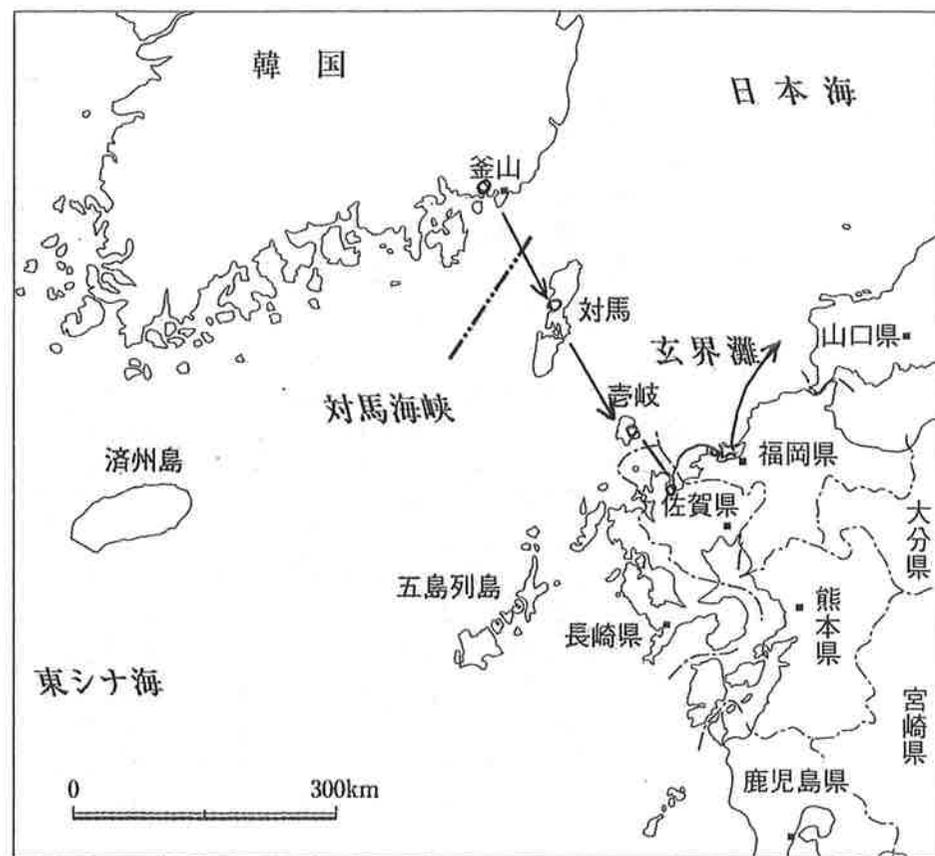


# 対馬海峡を渡る



確定された国間の表記里数を用いて距離換算を行い、魏の短里の妥当性と里数表記の誤差感を掴む（但し、位置をより厳密に比定するために、弥生後期遺跡における遺物最多数出土地を厳密な比定地とする）

参考:

魏の短里(里=75m)

古田武彦「邪馬台国はなかった—解読された倭人伝の謎」

1971年11月朝日新聞社出版

設楽博巳「三国志がみた倭人たち

—魏志倭人伝の考古学」

結果:

・魏の短里で概ね妥当と考えられる。但し、表記は厳密でなく2倍弱の誤差を伴う。

・また、壱岐国が一大国(元は一支国か?)と表記されるなど明確な誤字もある。しかし、根拠もなく誤字との主張はすべきではない。

記載地名	比定地	比定地の厳密化*	記載里数	換算距離	実距離	記載方角	実方角
帯方郡	ソウル	ソウル北郊	7000余	525km + α	約650km	南や東へ	南や東へ
狗邪韓国	釜山近郊	金海地域	1000余	75km + α	約160km		南へ
対馬	対馬	三根遺跡	1000余	75km + α	約160km	南へ	南へ
一支国	壱岐島	原ノ辻遺跡	1000余	75km + α	約85km		南へ
末盧国	唐津市	宇木汲田遺跡					

本文P3-C節

北九州から邪馬台国まで(1)  
 二大比定地(九州説と畿内説)と私見比定地

確定された国(末盧、伊都、奴、不彌)の厳密な比定地は通説に従ったが、伊都国は平原遺跡を採らず、糸島半島の東付け根とし、不彌は飯塚を採らず、宇美町遺跡を採用した。

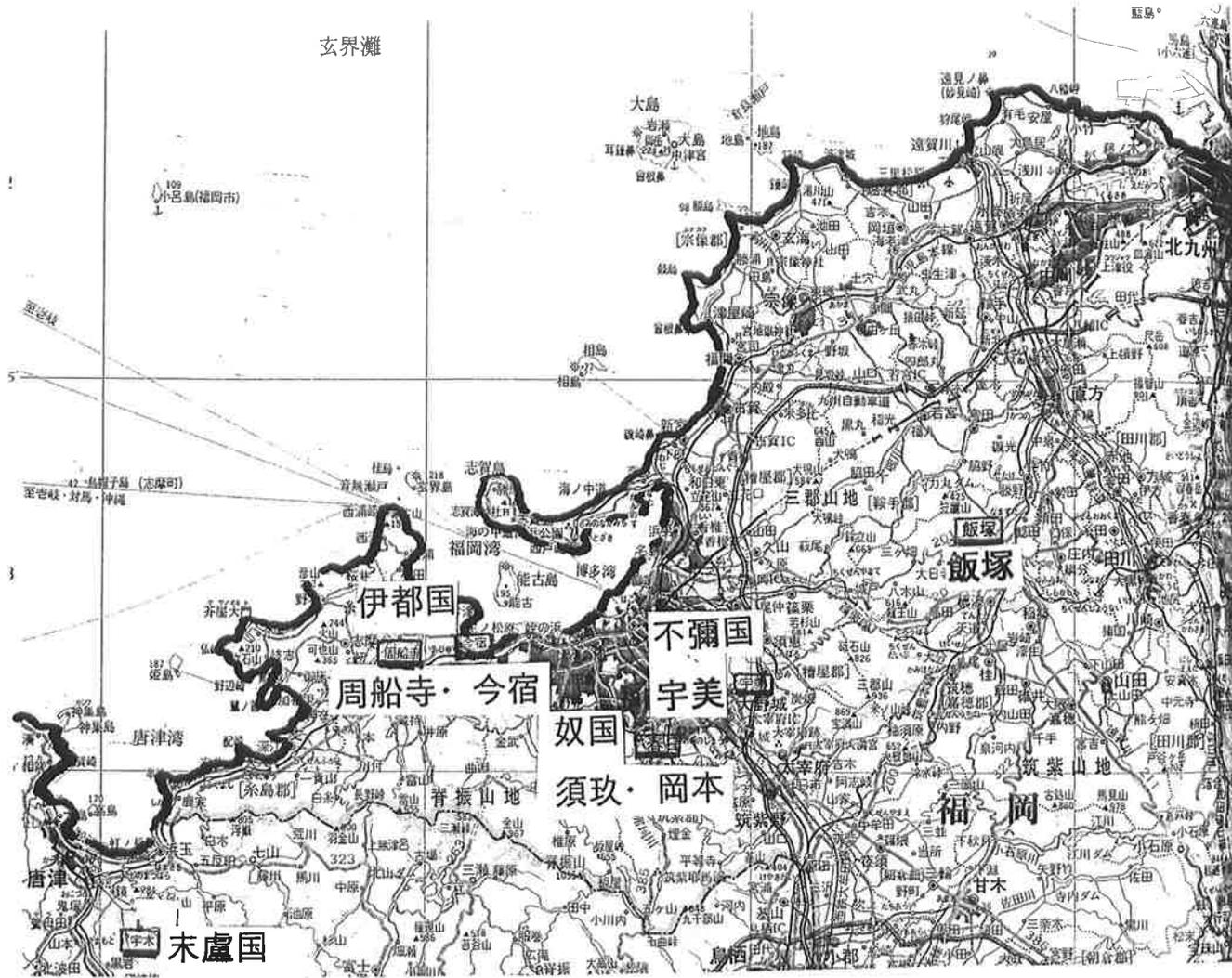
結果：  
 ・換算距離はほぼ一致。但し方向は微妙に異なる。



記載地名	比定地	比定地の厳密化*	記載里数	換算距離	実距離	記載方角	実方角
帯方郡	ソウル	ソウル北郊	7000余	525km + α	約650km	南や東へ	南や東へ
狗邪韓国	釜山近郊	金海地域	1000余	75km + α	約160km		南へ
対馬	対馬	三根遺跡	1000余	75km + α	約160km	南へ	南へ
一支国	壱岐島	原ノ辻遺跡	1000余	75km + α	約85km		南へ
末盧国	唐津市	宇木汲田遺跡	500	37.5km	30km	東南へ	北東へ
伊都国	糸島半島	平原遺跡(非採用) 周船寺・今宿	100	7.5km	15km	東南へ	東南東へ
奴国	博多湾岸	須玖・岡本遺跡	100	7.5km	8km	東へ	東北東へ
不彌国	宇美町・飯塚市	糟谷郡宇美町遺跡					
投馬国	?	出雲(その後、米子の妻木晩田?)		水行20日	約300km	南へ	北東へ
邪馬台国	?	例えば吉備?		水行10日後陸行1月		南へ	東、後南へ
				12000余 - 10700余 = 約1300 約97.5km			

本文P3—C節

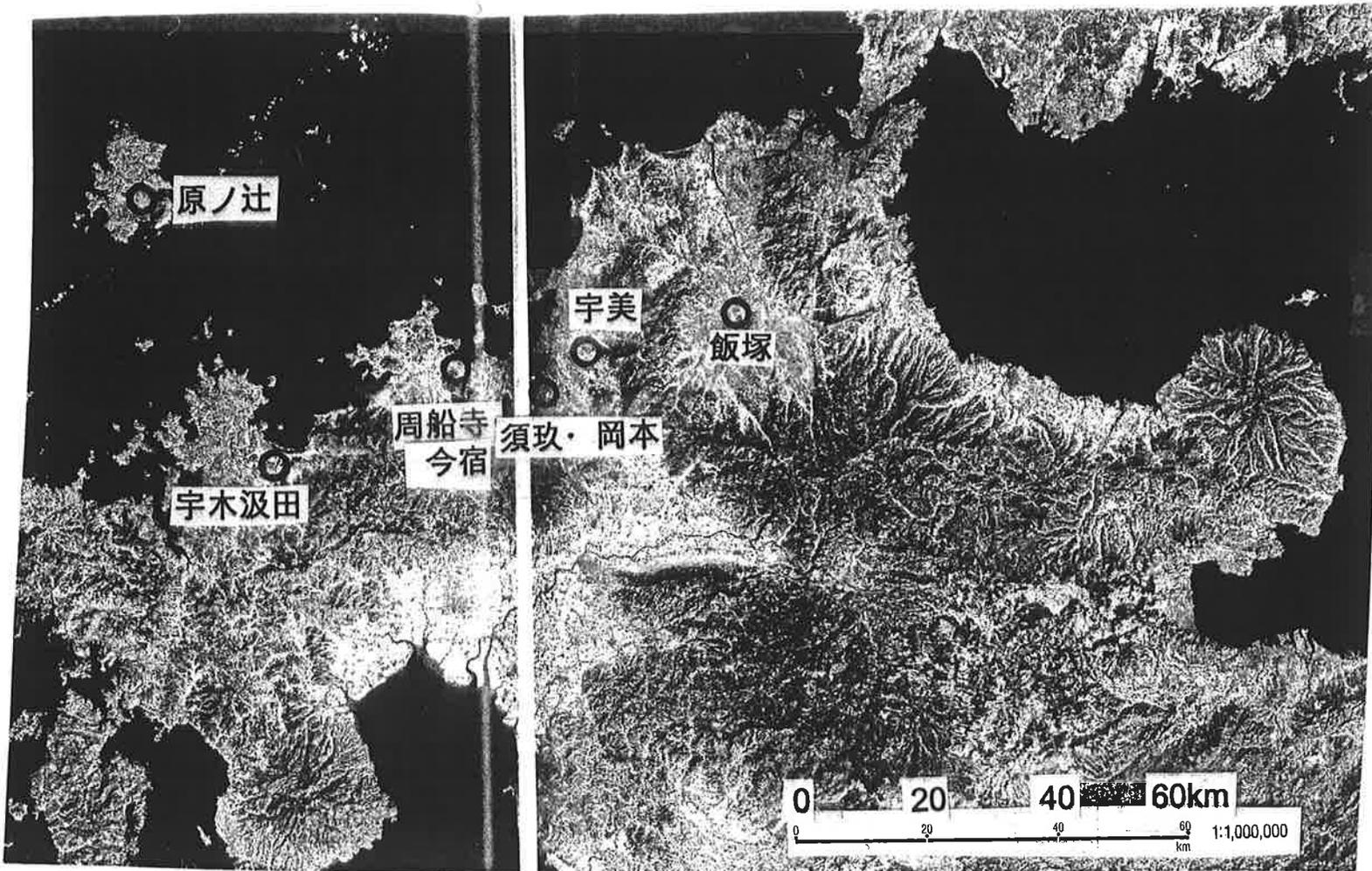
北九州から邪馬台国まで(2)  
北九州比定地地図1(現代地名)



宇木汲田

北九州から邪馬台国まで(3)

北九州比定地地図2(平野部(白地)と山岳部(黒地))



奴国→飯塚(不彌国)は不採用  
①険しい山岳地越えが必要  
②更に船出するためには  
盆地に入る必要はない。  
従って、  
奴国→宇美(不彌国)を採用

追記:  
佐賀平野・筑紫平野に広い  
後背地があるが  
邪馬台国九州説は  
①佐賀平野を魏使は通過せ  
ず、または到っていない。  
(朝鮮カラスがいるので)  
②投馬国や狗奴国など  
大国が存在する余地がない

### 本文P3—C節

## 北九州から邪馬台国まで(4) 邪馬台国の比定

旅程表記が里数から日数に変更されているのは、異なる報告書に記載である。

「瀬戸内海を利用して水行20日」はありえない。

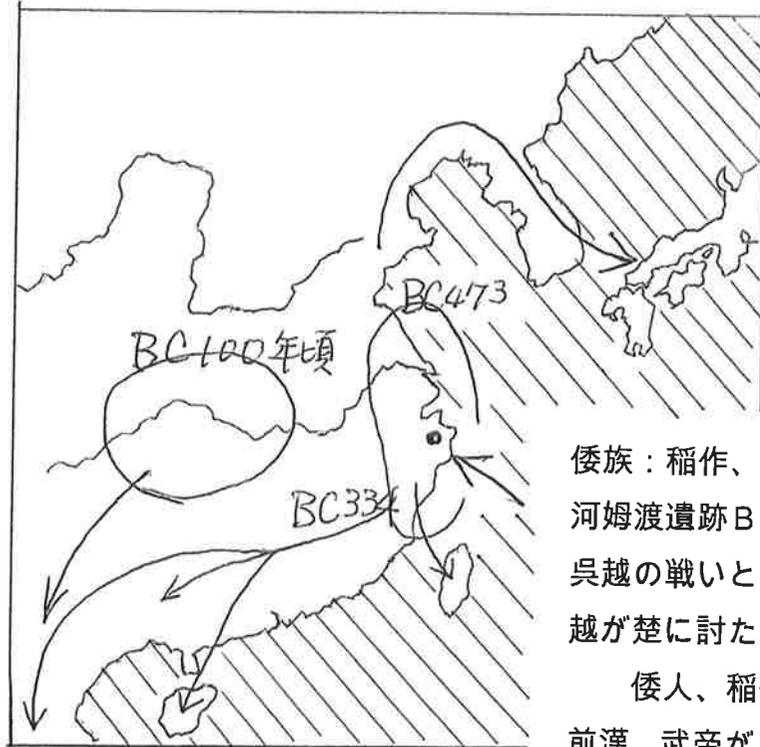
理由：

- ①多島美、瀬戸や灘という特徴を記載しないはずがない。
  - ②島に自生する目立つ樹木である松を記載しないはずがない。
- 従って、日本海側を水行するしかない。



結果：

- ・水行20日後、日本海側で最初の集落群をなす大きな平野は出雲平野であり、弥生遺跡も多い。
- ・次の水行10日は上陸地点として国の記載はなく、小集落と予想される。半分の日数感を距離にすると、米子(妻木晩田遺跡)または、鳥取(青谷上寺地遺跡)あたりが妥当と思われる。
- ・陸行1月で中国山地を横・縦断し瀬戸内海側に到達したと考える。  
邪馬台国は、規模は国家連合群であるので(吉備、播磨、摂津、讃岐、阿波)の地域と想定できる。  
魏使は瀬戸内海を渡っていないので、吉備、播磨、摂津の広域のなかの内陸部地点と思料される。  
後述する総距離感からすると吉備あたりか？



本文P5-E節

## 倭の社会、風習、自然、産物 倭族の起源、習俗、移動(鳥越憲三郎)

倭族：稲作、鯨面、文身、断髪、単衣、貫頭衣などの文化  
河姆渡遺跡BC4500年頃、現在の紹興を中心とした倭族勃興  
呉越の戦いと呉の滅亡BC473年、倭人東北の地、稲作と共に渤海湾岸へ  
越が楚に討たれ滅ぶBC334年、

倭人、稲作とともに台湾・海南島、南西のベトナム・タイへ  
前漢、武帝がBC100年頃、夜郎、を中心とした巴、且蘭などの西南夷の倭族  
を討ち、これら倭族を南下させる

AD178年、鮮卑、倭人の国を討ち、千余家を移して網捕の糧食を得る

(この頃、渤海湾岸に倭人が居住していたことの証拠)

鳥越憲三郎「中国正史倭人倭国伝全訳」による

倭族の民族性として外国人観光客が現代でも実感するような記載もあるが衣服、化粧については極めて南方的習俗・文化であり、その後の大和朝廷における、鯨面・文身の差別的処遇やみずら・白粉化粧のような習慣、甲類・乙類のような子音の区別といった北方系民族(北方渡来人)の文化的混合が認められない。

# 現代にも残る倭族の風習

鯨面、文身、断髪、横幅、貫頭衣



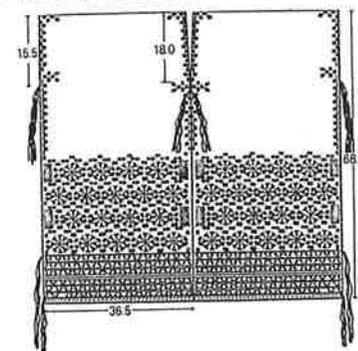
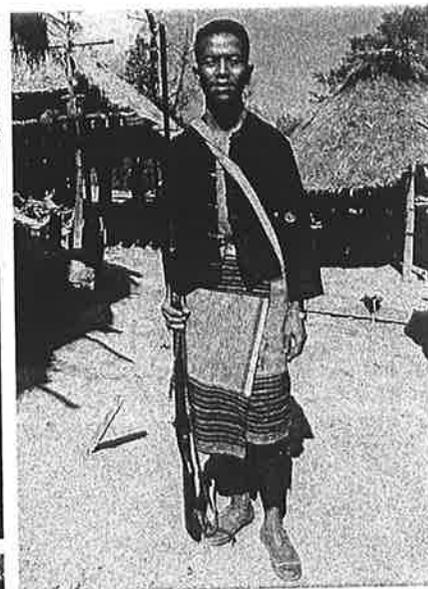
文身 (タイ、カレン族)



鯨面 (雲南、独竜族。伍金貴氏提供)



断髪 (タイ、アカ族)

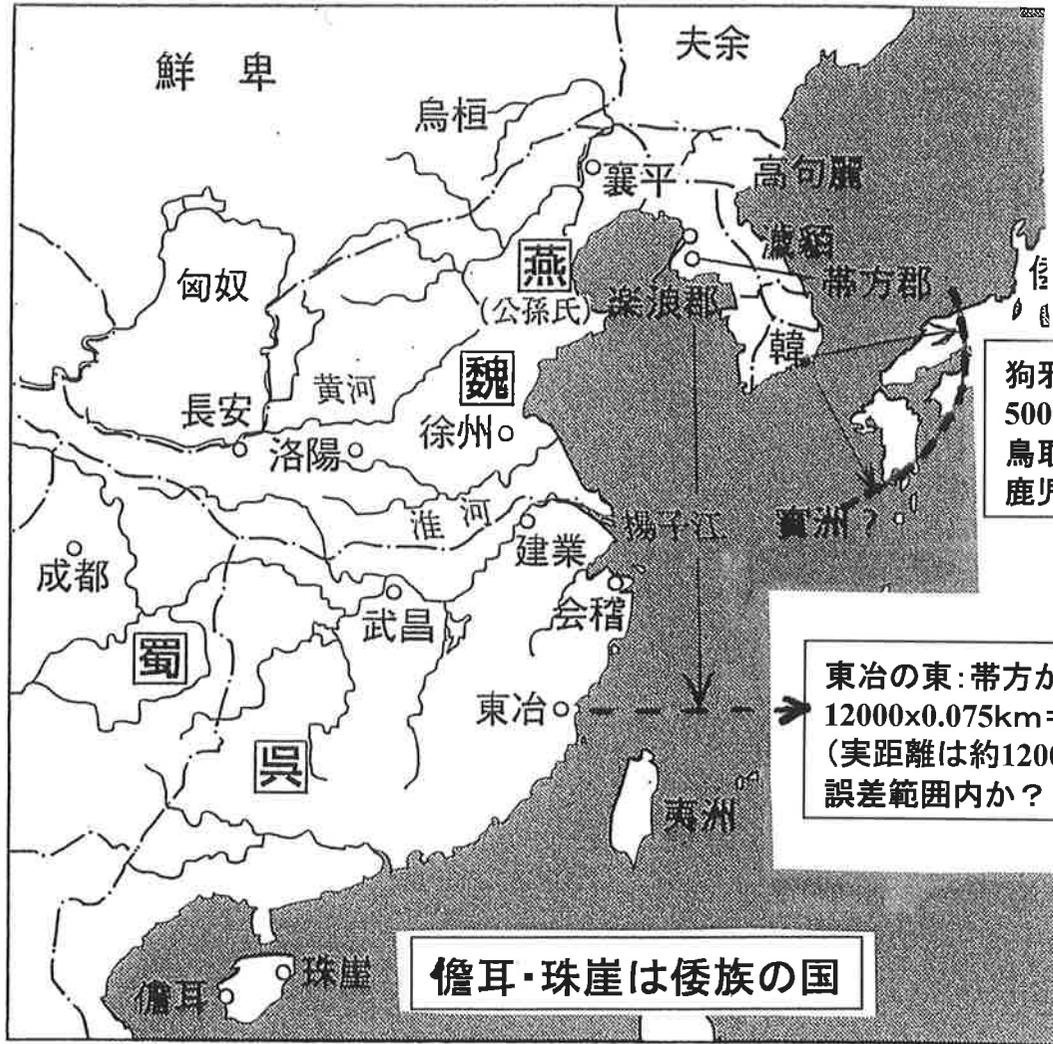


右上は横幅 (腰巻き。雲南、佤族)。左上は未婚女性のロング一部式の貫頭衣、左下と右下は既婚女性の二部式の貫頭衣 (いずれもタイ、スゴー・カレン族。作図は河野美代賀)

鳥越憲三郎

「中国正史倭人倭国伝全釈」による

# 邪馬台国の中国との位置関係



極めて唐突に挿入されたこの文章は、編者とは別の明確な意図が感ぜられる。編者陳寿は晋の著作郎であり、絶対に元の記録を改竄するような事はしない。従って、元の資料として倭の風習の記載文中にこの一文が挿入されて、分ち難い状態になっていたものと推定される。

周知のように魏志倭人伝の記述に従えば邪馬台国は沖縄近辺に存在することになり、この記述をほぼ裏付けることになる。この不合理は誰かが作為的に行ったと考えられ、この一文はトップダウンの体裁が強く、

狗邪韓国から5000里の到達範囲  
 $5000 \times 0.075 \text{km} = 375 \text{km}$   
 鳥取、岡山、高松、高知、宮崎  
 鹿児島を結ぶライン

これができるのは帯方郡の初代太守である劉夏以外にはありえない。

すなわち、邪馬台国を距離を変えずに方向のみを変え戦略的な位置(呉の東海域)に置き、帯方郡の位置づけを高めたものである。

旅程として途中までは、里数表示で、その後は日数表示で行い、総里数と位置を総括的に表すなど本朝からは矛盾が起きないように一貫した作為が感じられる。

東冶の東: 帯方から12000里で  
 $12000 \times 0.075 \text{km} = 900 \text{km}$  南方  
 (実距離は約1200km)  
 誤差範囲内か?

儋耳・珠崖は倭族の国

邪馬台国時代の東アジア

岩田一平「珍説・奇説の邪馬台国」  
 2000年4月豊国印刷出版より掲載、一部書き込み

# 本文P6-G節 現代の植物相の分布

弥生時代は小氷河期で現代より2m海退

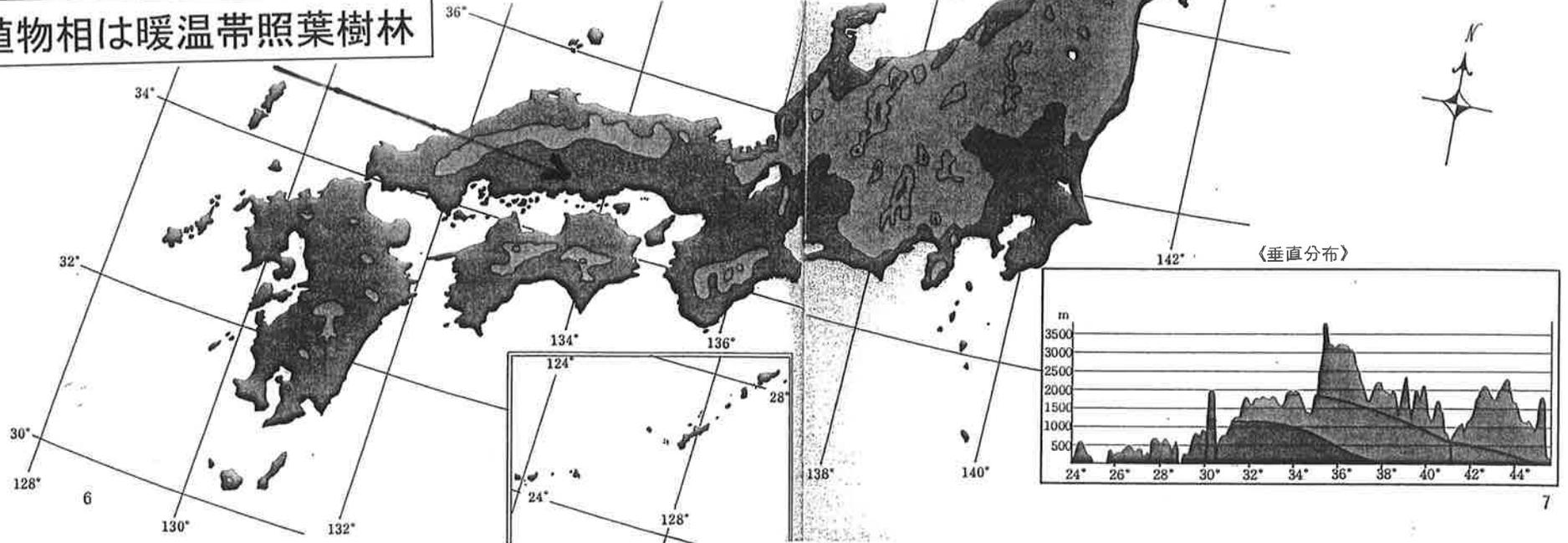
優占種による 植生帯	組成による 群落分類体系	相貌による 群落区分	水平 植生帯	垂直 植生帯
シイ帯 (アカマツ・コナラ林・シイ・カンシ林)	ヤブツバキクラス スダジイ リュウキュウアオキオーダー スダジイ ヤブコウジオーダー	照葉樹林 (常緑広葉樹林)	暖温帯	低地帯 (丘陵帯)
ブナ帯 (ブナ・ミズナラ林)	ブナクラス ブナ・ササオーダー ミズナラ・コナラオーダー	夏緑広葉樹林 (落葉広葉樹林)	冷温帯	山地帯 (低山帯)
オオシラビン帯 (オオシラビン・エゾマツ林)	トウヒ・コケモモクラス トウヒ シラビンオーダー	常緑針葉樹林	亜寒帯	亜高山帯
ハイマツ帯 (ハイマツ群落)	ハイマツ コケモモオーダー			
ヒゲハリスゲ帯 (低小草原)	クロマメノキ ミネズオウクラス ヒゲハリスゲ カラフトイワスゲクラス	低小草原	寒帯	高山帯

( ) の中は、本書の各章のテーマに当る。

-  照葉樹林
-  常緑針葉樹林
-  夏緑広葉樹林
-  低小草原

中西哲他 (水平分布)  
「日本の植生図鑑<I>森林」  
1983年6月保育社発行による

倭の植物相は暖温帯照葉樹林



森林の植生

日本の潜在自然植生

《垂直分布》

# 現代日本の暖温帯樹林の分布図

栂だん



榎



豫樟

タブノキ  
ホソバタブ



榎

クヌギ



弥生時代は海退(海面後退:現代より約2m)から  
小氷河期であり、低温であったことが知られている

榎

アカガシ



楓香

イロハモミジ



参照) 橡

トチノキ



橡は榎や栂とともに  
冷温帯樹林に属する

魏志倭人伝の記載の樹木は西日本域に生育。  
奈良盆地、京都盆地は境界領域なので夏緑広葉樹林(例えば、橡や水栂)も混在する可能性が大きい。

本文P7ーG節、H節

## 倭人伝中に目立つ奇妙な言葉(造語)

倭人伝で使用された言葉は

- ・中国語であるか、
- ・中国語に翻訳可能な事物を中国語で表現したもののか、
- ・固有名詞など倭語を中国人が聞き取って近い音韻の漢字を当てた(出来るだけ侮蔑的な意味の漢字を採用)ものであるが、

下記の二つは、中国語の知識がある倭人が造語したように思える

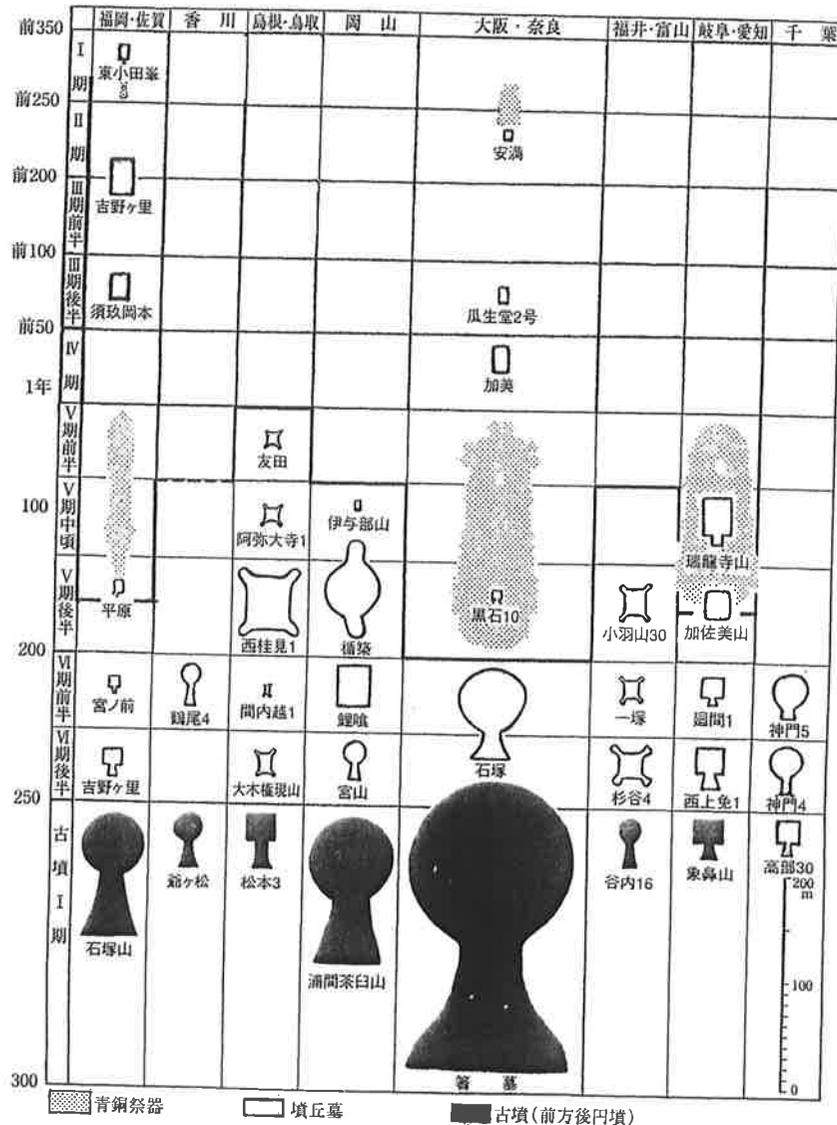
大率: 対外国との手続き監視も含め検察業務の長官

→伊都国に置かれたことより後の、大和朝廷における太宰府に発展か？

大倭: 各国内の市に運営を監視する役職(当時、おおやまとと呼称していたのか?)

→後の、畿内大和の地域に転化、もしくは人名に転化？

# 墳丘墓から古墳への移行時期

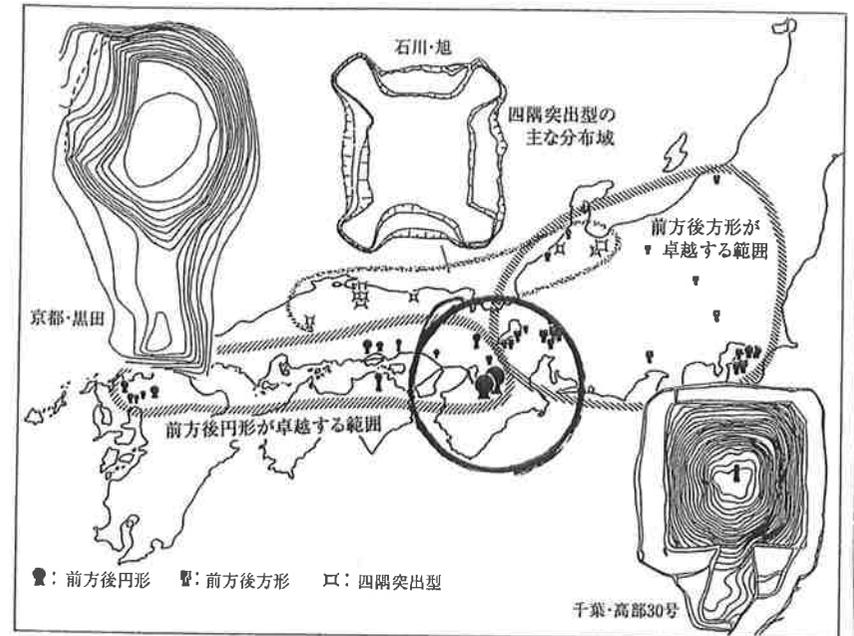


弥生の墓から古墳へ(注1春成論文による)

## 弥生の墓から古墳への移行時期

設楽博巳「三国志からみた倭人たち—魏志倭人伝の考古学」より

長大な墳丘墓の発達は畿内特有  
さらに方形周溝墓は畿内から近江、  
伊勢湾沿岸の東海西部に定着し、  
西は播磨から東は関東・北陸の西部まで



第6図 邪馬台国時代(3世紀前半)の首長墓の形とその分布(マークの大きさは規模に比例。長径20m以上のものに限定したが、分布上重要なものはその限りでない。注7松木論文による)

## 方形周溝墓の形と分布

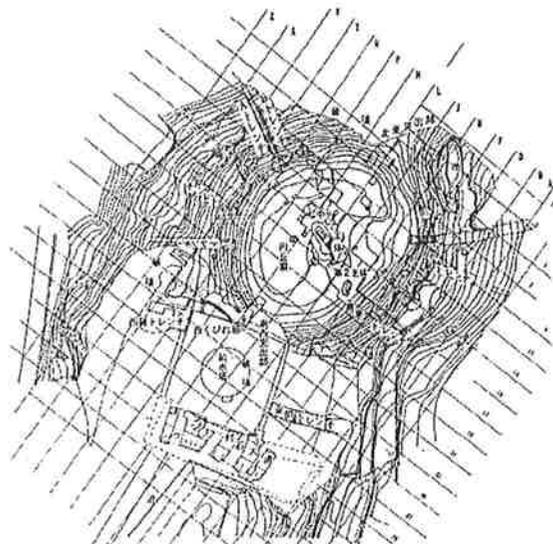
「三国志からみた倭人たち—魏志倭人伝の考古学」より  
掲載。長大な墳丘墓の分布圏を○で追加して表す。

本文P10—M節  
 楯築墳丘墓と箸墓古墳の比較

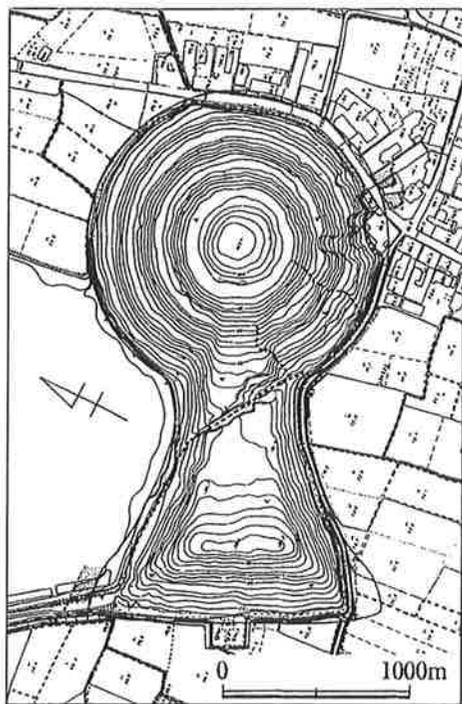
卑弥呼の冢 魏の短里(短歩0.25m)による距離換算  
 百余歩: 25m + α

円丘部の径約50m、高さ5m

全長約280m、  
 後円部の径約160m、  
 高さ25m



楯築遺跡の墓塚 (楯築刊行会「楯築弥生墳丘墓の研究」所収)  
 長軸約9m、短軸約5.5m、深さ約1.8mの極めて大きなもの。ほぼ中央に木槨を設け、その中に木棺を置き、木棺頭側部から排水用の暗渠がある。



箸墓古墳の墳丘想定復元図



楯築墳丘墓

結果:

- ・冢は穴を掘り槨を作り、棺を納め封土をしたもの大きくとも墳丘墓のサイズ。
  - ・墳は槨の周囲を石や土で構築し建造物となしたもの。両者は明瞭に区別される。
- 卑弥呼の墓は冢である。サイズの的にも楯築墳丘墓のクラスである。  
 魏志倭人伝には古墳に関する記載は一切ない。

箸墓古墳

設楽博巳「三国志からみた倭人たち  
 —魏志倭人伝の考古学」より